



左/「豊田の家」。室内は木と漆喰で仕上げる。自然素材であり、温度や湿度を調整する効果もあるため、快適な生活空間を約束する。右/キューブタイプの「葛西の家」の外観。伝統的な木組の家も、現代の生活やご要望にそってデザインすれば、新しいカタチも生まれる。狭い敷地でも、吹抜けのある家が可能。

伝統的な木組を科学的に検証し、未来を支える構法へワークショップ「き」組、新たな展開を開始

文 松井郁夫（一般社団法人ワークショップ「き」組代表理事）

ワークショップ「き」組は、国産材を使い、伝統的な木組の家づくりを実践する、全国の職能グループです。おかげさまで、2010年で7年目を迎えます。手仕事による日本の気候風土にあった家づくり、多くの住まい手の方々に喜んでいただいております。

わたしたちは、家づくりを進めながら地球環境を支えていくために、二酸化炭素を吸収し酸素を供給する光合成に優れた素材「木」の力を借りることが重要だと考えます。そのためには伝統的な大工技術はもちろん、省エネルギーにもつながる温熱環境の工夫も備えた長寿命の木組の家をつくることです。

昨年来、世界に吹き荒れる不況の風は、産業界にとっては逆風ではありませんが、これまでの経

済のあり方に対して、ものづくりにも地球環境に配慮した方向転換を迫っているものと考えられます。まさにワークショップ「き」組が2003年開設以来、取り組んできた木組の家づくりが見直される時期が来ましました。

そこで昨年は全国展開を目指し、一般社団法人として新たな船出をいたしました。日本の伝統技術である継手仕口を使い金物に頼らない木組は、低炭素時代を担い、循環型の環境をつくるうえで、これからの未来を支える構法であると考えています。

2008年度より、国土交通省も伝統的構法を建築基準法の中に位置づけるために設計法の見直しを始めています。ようやく科学的な検証と評価が及ぶ時期に、つくり手はネットワークを組む必要に迫られています。これからの木組の家は、構造的数値化や性能規定化の壁を乗り越えなければなりません。ワークショップ「き」組は、個人では解決の難しい実験を行い、公的なデータの作成に取り組んでいきたいと思えます。また、木組の家をつくりたいと考える設計者や工務店を支援する、サポート「き」組という仕組みも実施しています。「グッドデザイン賞」や「長期優良住宅先導的モデル事業」にも採択され、ますます広がりある活動を実践していくつもりです。

本来、日本の家が備えていた、無

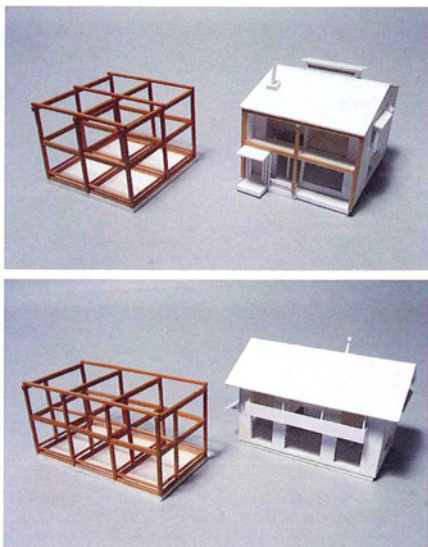
左/木と木をめり込ませるように組む「建て方」の様子。貫や梁が梯子のように組まれ、全体が籠のように編まれることで、地震や台風に対して粘り強い建物となる。右/日本の伝統的な木組の代表的な接合部「四方差し」。中心の柱を太くして大黒柱とする。木と木を組んだり、はずしたりすることで、移築や再生が可能になる。



ワークショップ「き」組

木組の家づくりを実践する設計者、工務店を中心に、天然乾燥の杉材を提供できる林業家、製材所など、会員は現在14人。ビジター会員は、定期的なニュースレターなどにより情報を受け取ることができ、「き」組主催のイベント、見学会などに参加できる。ただし、住まい手の紹介を受けることができるグループ会員には資格審査がある。http://kigumi.jp/

手入れされた杉の木立。植林から成木になるまで60年の年月が必要である。その間に下草刈りや枝落とし、間伐など手をかけて育てる。葉枯らし乾燥の後、製材され職人の手に渡る。



コストダウンを図るため、製材寸法に合わせて考えられた架構タイプ。敷地の形状によってキューブタイプ・リニアタイプが選べる。もちろん間取りの設計は自由。上/キューブタイプ。下/リニアタイプ。